

1-5

並行読書を取り入れた読解指導の考察

山下敦子

本研究は、小学校国語科の読解指導において、並行読書を位置付けることの効果を整理し、より効果的な指導法の開発を目的とした。並行読書とは、単元の指導目標をより効果的に達成するために、教科書教材と関連させた文や文章を読むことを位置付ける指導のことである。

まず、並行読書を指導に位置付けることの効果について先行研究や先行実践を分析し、整理した。一単元において複数の教材を扱うことで、既習のテキストの構造や内容を応用して読む、既習のテキストと相違点を見つける、自己の課題を見つける、自分の意見と比べながら読む等の方略を身につけることができる。こうしたことから並行読書を位置付けた指導は、児童の能動的な読みを促進するとともに、「比較」「分類」「関連付け」「分析」などの論理的な思考力を育成することができる。

次に、並行読書を位置付けた指導計画を立案し実践、分析を行った。1. 並行読書を行う際の選書には、指導のねらいに応じた観点が必要であること 2. 読みの力を系統化し、それに応じた並行読書を行うことで論理的な思考力の育成に効果があること 3. 並行読書を位置付けることによって児童の読みが能動的に変容すること について、授業の分析や児童への意識調査等をもとに明らかにした。

1-6

高齢者の義歯使用が栄養状態に及ぼす影響に関する臨床学的研究

金久弥生

食事を通じた栄養摂取は生命維持の基本であり、栄養摂取の不良から生じる低栄養は、高齢者の免疫力の減少、身体の機能低下を招き、直接的ならびに間接的に寝たきりや死亡の原因になる。これまでに栄養摂取不良を招く食事量や食物摂取の偏りに口腔状態が関与することは海外の研究結果で示されているが、食文化や社会構造の異なるわが国で同様の結果が得られるか否かは明らかでない。また、一方、高齢者で残存歯が20本未満では、20本以上よりBody Mass Index (BMI) が有意に低く、また、無歯顎高齢者での1年間の体重減少は有歯顎高齢者より有意に多いとの報告があるものの、義歯治療による口腔機能回復が高齢者の栄養改善につながるかについてはほとんど検討がなされていない。

本研究では、まず地域在住健常高齢者の食事摂取状況を明らかにすることで歯の喪失が食事摂取に及ぼす影響を検証し、次いで、低栄養となる危険性の高い要介護高齢者の義歯治療前後の体重変化を検討することで、咬合の回復と高齢者の栄養改善の関係を明らかにすることとした。これらの結果より、義歯治療を通じた歯科医療の介入は高齢者の栄養の維持・改善に有益であることが示唆された。

現在多くの病院や施設・地域で栄養サポートチームが実施されていたり、介護保険施設では、栄養改善を通じた介護予防の取り組みが行われており、このような栄養改善の試みに歯科が積極的に関わる必要性を示しているものと考えられる。